5/3 朝日

平和を守る 手放さない

「ふだん」の努力

憲法を考える 下

小浜・九条の会 北川昭二さん（74）

小浜市遠敷7丁目の北川昭二さん(74)は34年間、県立高校で社会科を教えてきた。「小浜・九条の会」では、結成時から事務局長を務めている。

1歳のときに実の父が戦死して、3歳で養子に出された。父の死に関しては、「硫黄島に行く途中で船が沈没したらしい」という程度のことしか知らない。そのためか、戦争の記憶はないが、物心ついたときから戦争に嫌悪感を抱いた。

第九条

① 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

② 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

高校教諭になり、竹本源治の「戦死せる教え兒よ」という詩に出会った。

「逝いて還らぬ教え兒よ 私の手は血まみれだ！ 君を縊ったその綱の 端を私も持っていた しかも人の子の師の名において」

教え子を戦場に送った教師の悲痛な叫びに接して思った。「こんな思いをする教師にはなりたくない」。二度とそんな状況を作らないと、心に誓った。

「憲法は自分を守る武器になる。でも多くの人はそれを知らない」。だから、現代社会の授業では、どんな事例も憲法に結びつけて教えるようにした。

特に憲法の目指す理想が詰まった前文は、必ず暗記させた。「憲法を理想主義だという人がいるが、日本ではその理想が、70年もの間、現実であり続けた。決して手放してはいけない」

だが、憲法改正の機運は高まる。危機感を持った文化人らが2004年、「九条の会」を結成。全国的な広がりを受け、06年に80人ほどが集まり、「小浜・九条の会」を結成した。

改憲反対の署名を呼びかけるチラシを見せて説明する北川昭二さん＝小浜市遠敷7丁目

北川さんは事務の仕事を引き受け、講演会や映画上映会の企画、ビラ配り、署名集めなど、会を支える活動に徹した。「9条の大切さを知ってもらうために、少しでも力を尽くしたい」

目指すのは9条をまもるだけではなく、世界中の人たちが平和に暮らせるようになることだ。「民族や言語を超えて人類皆で仲良くする」という理念に共鳴して、国際共通語の「エスペラント」の普及活動にも力を入れている。「共通の言葉で話すことができれば、心を通わせられるかもしれない」と夢見る。

会の結成時より、改憲はより現実味を増していると感じる。山登りや絵描きなど、やりたいことはたくさんある。しかし、9条をまもる活動は、まだやめられる状況にはない。「今を生きる人間の一人として、世界を未来へとつなげていかないといけない。そのために今できる範囲のことを続けていく。それだけです」

（南有紀）